向き合う

3歳の長女、腹部のがんに

いのちをバトンタッチする会
代表 鈴木 中人さん ①

長女の景子が3歳の夏だった。会社に妻から電話が入った。「景子ちゃんのおなかに腫瘍がある。すぐ総合病院に行くように言われた」。泣きながら伝える妻の声を聞き、「そんなバカな……」という思いがぐるぐると頭の中を回った。

景子は最近元気がなく、遊んでいてもすぐにペタンと座り込んでいた。クリニックの医師は夏風邪を疑ったが、腹部の触診でしこりに気づき、エコー検査で腫瘍を見つけた。

総合病院の診察室では紹介状を読んだ医師がただならぬ表情を浮かべた。触診して告げた言葉は「神経芽腫かウィルムス腫瘍があると思われます」。初めて聞く病名に「がんですか?」と尋ねると、医師はうなずいた。妻も私も言葉を失った。

入院した小児外科系の病院で検査を受け、腹部の交感神経などにできる小児がんの神経芽腫と確定した。病状は進んでおり、医師は「助かる確率は高くて15%」という。諦めてくださいと言われた感じがした。それでも「15%ある。絶対助ける」と自分に言い聞かせた。

医師は手術を優先する考えだった。最適な治療法を選びたいと飛び込んだ大学病院では「よい抗がん剤が開発され、専門医もいる。希望を持って」という。どの治療法、どの病院か。今のようにインターネットもなく、まさに右往左往した結果、大学病院での治療を選んだ。

1992年8月末に始まった抗がん剤治療の副作用は想像以上だった。苦しむ景子の背中をさするしかできなかった。抗がん剤後の手術は大成功で、10月末には完全寛解になった。

その後も抗がん剤治療は続いたが、約2年後に治療を終了するため精密検査を受けた。全部異常なし。最後に念のため撮影した脳のCT検査で転移が見つかった。当時は学会で発表されるほどの珍しい脳転移だった。

すずき・なかと 1957年愛知県生まれ。81年デンソー入社。92年に長女が神経芽腫と診断されたことをきっかけに、小児がんの支援活動に取り組む。2005年に早期退職し、学校や病院、企業などで「いのちの授業」や研修をする活動を続けている。

掲載日 2024年12月14日 日本経済新聞　朝刊 024ページ © 日本経済新聞社 無断複製転載を禁止します。